

温く含んだ南の風が
かたまりになったり紐になったりして
りうりう夜の稲を吹き
またまた黒な水路のへりて
はんやくるみの木立にそとく

.....地平線地平線
灰いろはがねの天末で
銀河のはじが茫平とけむる.....
熟した藍や袴のほひ
一きは過ぎる風跡に
蛙の族は声をかぎりうたひ
ほたるはみだれていちめんとお

.....赤眼の蠅
.....蛙の髪
.....蛙が蛙をからかつて、
.....泥は消えたりともつたり

.....風が蛙をからかつて、
.....そんなにぎゅつぎゅつ云はせるのか
.....蛙が風をさうこんで、
.....そんなにぎゅつぎゅつ叫ぶのか.....
北の十二のまはりから
三目星の座のあたり
天はまるでいちめん
青じろい袍薄にでもかかったやう
天の川はまたぼんやりと爆発する
.....ながれるといふことが
.....たゞもう風のころるなので
.....稲を吹いては鳴らすと云ひ
.....蛙に来ては鳴かすといふ.....

天の川の見掛けの燃えを原因した
高みの風の一例は
射手のこつちで一つの邪気をそらにはく
それのみならず蠍座あたり
西蔵魔神の布呂に似た黒い思想があつて
南斗のへんに吸ひついで
そこらの星をかくすのだ
けれども悪魔といふやつは、
天や鬼神とおなじやうに、
どんなに力が強くても、
やっぱり流転のものだから
やっぱりあんなに
やっぱりあんなに
どんだん風に浴される
星はもうそのやさいい面影を恢復し
星はふたたび古代慈悲の曼陀羅になる
.....堂は青くすきとほり
.....稲はさわざわ葉擦れする.....

うしろではまた天の川の小さな爆発
たちまち百のちぎれた星が
星のまばらな西寄りて
羅陀道家の家紋を織り
天をよそよそふ鬼の族をかす
ふたたび蠍の大火をかす
.....蛙の族はまた乳り
.....大梵天ははるかにわらふ.....
奇怪な印を挙げながら
ほたるの二足がもつれてのほり
まっ赤な星もなげれば
水の中には末那の花
あゝあたたかな曼陀羅の群が
南から傾になったり暮になったりして
くるみの枝をざわだたせ
またわかれの耳もたて
銅鑼や銅角になって砕ければ
古生銀河の南のはじは
こんどは白い湯気を噴く
(風ぐらを増す

そうらこんどは
射手から一つ光弾が投下され
風にあらびるやなぎのなかを
淫蕩に青くまた芽え芽えと
蛍の群がとびめぐる

一九三四、七、五

三四五 [Largo や青い雲滄やながれ]

Largo や青い雲滄やながれ
くかりんの花もほそほ暗く燃えたつころ
.....延びあがるものあやしく曲り怒むもの
.....あるいは青い雲をまとふもの
.....風が苗代の緑の影と
.....はんの木葉にささやけは
.....馬は水けむりをひからせ
.....こどもはマオリの呪神のやうに
.....小手をかざしてはねあがる
.....あますつばい風の脚
.....あますつばい風の足音.....
.....くわくこうひとつ啼きやめば
.....遠くではまたへつこのくわくこう
.....蛙はたひらこきむぼうげ

また田植花くすんで替いすいばの穂.....
つかれ切つては泥を一種の胎ともおもひ
水をぬるんだ汁ともおもひ
またたくさんの鈴のラムプが
蛙で燃えるとかながへながら
またひとまはりひとまはり
鉛のいろの代を掻く
.....たてがみを
.....白い夕陽にみだす馬
.....その親に肖たうなじを垂れて
.....しばらく蛙の草食ふ馬.....

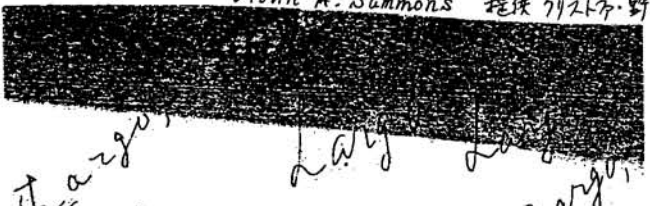
槍葉かかげるへば
赤橋の木綱のかゞみを吊し
こどもはこんどは悟空を気取り
黒い衣裳の両手をひろげ
またひとまはりひとまはり
.....ひらめくひらめく水けむり
.....はるかに漂る風の滄.....
.....遠くつて桐の花が咲き
.....その玉顔しづかに無けて盛りあがる

一九二五、五、三一

Piano acomp e. g. Die Csikos-Post
Hermann Necke
Romance
allegro con brio
Johan S. Svendsen

Sol G Lento molto

(7-70 Romance J. Svendsen Col. 4954)
Violin A. Sammons 提供 7427 野沢



Largo (Händel) V. 34412
(Sp. 13-14 Violin Maud Powell)

Gavott
Jan Becker

(7-70 Gavotte J. Becker)
Violin 鈴木金一
Col. AK 297

一九二五、七、一九、

ぎざぎざの斑瀾岩の組つたひ
膠質のつめたい波をながす
北上第七支流の岸を
せはしく頭へたびたびどくはねあがり
まっしぐらに西の野原に奔けおるる
岩手軽便鉄道の
今日の終りの列車である
ことさらにまぶしさうな眼つきをして
夏らしいラヴスインをつくらうが
うつうつとしてイリドスミンの鉱床などを考へようが
木影もすべり
種山あたり雷の微塵をかがやかし
列車はごうごう走ってゆく
おぼまつよびくさの許落や
イリスの青い火のなかを
狂気のやうに踊りながら
第三紀末の紅い巨礫層の鋭り割りでも
ダイヤラヂツの星みらでも
一つや二つ岩が線路にこぼれてようと
積雪が均けようと崩れようと
こちらは全線の終列車
シゲナルもタブレットもあつたもんでなく
とび乗りのできないやつは乗せないし
とび降りぐらやれないものは
もうどこまでも連れて行つて
北極あたりの大遊園市でおろしたり
銀河の発電所や西のちれた鉛の雪の鉱山あたり
ふしぎな仕事に案内したり
谷間の風も白い火花もこつちやこつちや
接吻をしようと詐欺をやらうと
ことごとぶるゆるめて頭へる窓の玻璃
二町五町の山ばたも
壊れかかった香魚やなも
どんどんうしろへ飛ばしてしまつて
ただ一さんに野原をさしてかけおるる
本社の西行各列車は
運行敷で軌によらざれば
振動けだし常ならず
されどまたよく響血をもみまげ
.....Prirr Prirr.....

心肝をもみほこすが故に
のほせ性こり性の人に効あり
さうだやっぱりイリドスミンや白金鉱区の見論見は
鉱染よりは砂鉱の方でたてるのだった
それともいちど阿原峠や江刺峠を洗つてみるか
いいやあつちは到底おれの根気の外だと考へようが
恋はやさし野への花よ
一生わたくしははりませんと
騎士の誓約強いベースで鳴りびびかうが
そいつもこいつもみんな地塊の夏の泡
いるかのやうに踊りながらはねあがりながら
もう積雪の焦げたトンネルも通り抜け
緑青を吐く松の林も
続々うしろへたんでしまつて
なほいつしんに野原をさしてかけおるる
わが親愛なる布佐機関手が運転する
岩手軽便鉄道の
最後の下り列車である